

Interview

## Max Ionata

マックス・イオナータ

近年、ハイ・ファイヴ、フアブリツィオ・ボッツ(tp)などの逸材を世に送りだしているイタリア・ジャズ・シーンから、またひとり注目のプレイヤーが日本デビューを果たす。彼の名はマックス・イオナータ(ts)。日本ではまだ知名度は高くないが、ボツゾらとともに“イタジャズ”のシーンを盛り上げる伊達男だ。今回は、イタリアで新作のレコーディングを終えた彼に直接話を聞くことができた。日本初となるインタビューをお届けしよう。

Interview & Text by Yuko Motohashi  
Photo by Andrea Buccella  
Courtesy of albore jazz



### 日本でのアルバム発売は とても重要な意味を持っている

—イタリアのピカント・レーベルからの「テナー・レガジョ」に引き続き、日本デビュー・アルバムとなる「インスピレーション」のリリースも決まりました。しかし、まだ日本にはあなたのことを知っている人が多くありません。まずはあなたの経歴から聞かせていただけますか？ そもそも、サクスのとの出会いはいつだったのでしょうか？

**マックス・イオナータ**(以下MI)：子供の頃、地元のマーチング・バンドでたまたま手渡された楽器がサクスだった。しかし、趣味として演奏はしていたけど、プロになるという考えはまったくなかった。その後、周囲から勧められて、仕事をしながらサクスの勉強を続けていたのだが、イタリアとフランスのあるコンクールで優勝したのを機に仕事を辞め、プロ・ミュージシャンとしてやっていくことを決めたんだ。

—現在使用している楽器は？

**MI**：イタリア製のボガニーのシルヴァー・パール。すべて職人の手作業によるユニークな楽器だ。ジョー・ロヴァーノ(ts)もこのサクス愛用している。使い始めてもう何年も経つけど、とても

気に入っていて、みんなに勧めているよ。以前はいつものウィンテージを持っていたけど、今はこのボガニーだけ。ウィンテージにはない本当に独特な音色を持っているんだ。さらに、音もパワフルで、イントネーションも完璧な楽器だ。

—マウスピースは？

**MI**：マウスピースは、僕の友人、フィリップ・ブッチがモディファイした“オットーリング”のウィンテージで、テップ・オブニングはH。とはいえ、ほとんど彼のハンドメイドといってもいいくらいだ。そして今度は、僕のカスタム・モデルを製作してくれているところだよ。

—今回いよいよ日本デビューされることについて、感想をお聞かせください。

**MI**：このチャンスが訪れるのをずっと心待ちにしていた。そして遂にアルボレ・ジャズ

とのコラボレーションが実現した。僕のミュージシャンとしてのキャリアにおいて、日本でのアルバム発売はとても重要な意味を持った。だからとてもうれしく思っている。

—来日経歴はありませんが、日本に対してどのような印象をお持ちですか？

**MI**：人々の温かさ、礼儀正しき、センスの良さ。とにかくいつも良い話ばかりを耳にするよ。これを機に日本で演奏できることを心から願っている。その素晴らしいさを感じてこの目で確かめてみたいんだ。

### ミュージシャンとしての第一歩となった フアブリツィオ・ボッツとの出会い

—今回のアルバムに収録した曲のうち、ご自身で作曲された曲は？

**MI**：今回は2曲のみ。というのも、ルーカ・マンヌツァ(p)が素晴らしい曲をたくさん用意してくれたから。彼は長い付き合いで、今では僕の人生の一部になっている。もちろん仕事の上で(笑)。彼の書く曲はいつも素晴らしい、提供してくれるものはいつも喜んで受け入れている。僕



アルバムに参加した、盟友・フアブリツィオ・ボッツ(tp/左)、陣中であるホットなプレイを聴かせる。ピアニストルーカ・マンヌツァ。



『インスピレーション』  
**マックス・イオナタ・カルテット**  
**feat. ファブリツィオ・ボッソ**  
 アルボレー・ジャズ ALB00-001 (7月8日発売)  
 ■リトナー・フレンズをサトウジ(シヤニニ・  
 ストックワグス)・ファンクワグ(キヘール・  
 長崎ノブ)・ラフ(カズ)・テラブルト(モリツグ)・  
 フォー・セール(非ラジカル)・非エンド・オブ・  
 ラ・アフェア ■マックス・イオナタ(t), ルー  
 カ・マンヌツァ(p), ニコラ・ムレーズ(b), ニ  
 コラ・アンジェルツッチ(ds), ファブリツィオ・  
 ボッソ(t), ブルーノ・マルコツツィ(perc), ジェ  
 ジ・テレスフォロ(vo/vo/s)

アルバムに参加したメンバー。左から、ニコラ・アンジェルツッチ(ds)、ルー  
 カ・マンヌツァ(p)、マックス・イオナタ(t)、ニコラ・ムレーズ(b)。



の2曲に関しては、これまでとはテイストの異なる作品で、新しい試みになっている。そういう意味でとても満足している。

—そして、今回はファブリツィオ・ボッソ(t)が参加していますね。

MI: ファブリツィオとは、彼がまだ18~19歳の頃、ウンプアー・ジャズに出演していた時に初めて出会ったんだ。僕はまだ観客のひとりだったけど、彼はもうプロとして演奏していた。その後親しくなるうちに、それまでの仕事を捨ててプロとしてやっていくことを強く勧めた。僕を励まし、勇気を与えてくれたのが彼だった。だから、今の僕があるのは彼のおかげなんだ。今回の彼の参加は、その素晴らしい音楽性を必要としたのはもちろんだけど、僕にとってはさらに大きな意味がある。僕を信じ、ミュージシャンとしての一歩を踏み出させてくれた彼に対する感謝の意でもあるんだ。

—いま、レコーディングを終えての感想をお聞かせください。

MI: 密実なメンバーの結束力が強まったのを感じるよ。レコーディングとは、次のステップに進むための節目、つまり卒業試験のようなものなんだ。すべての曲を録り終えたら、次のアルバムに向けてはかならない。そのためにさらなる研究やアイデア、新しいプロジェクトが求められる。だから、レコーディングは新たなステップを踏み出すき

っかけを与えてくれる。今回もまさにそんなレコーディングだったと言えるね。

### 人に感動を与えることが僕らミュージシャンの仕事

—あなたが最も影響を受けたミュージシャンを教えてください。

MI: 誰かひとりを選ぶのは難しいけど、最も衝撃を受けたのはジョン・コルトレン(ds)だ。他にはジョー・ロヴァーノ(t)やエリナー・パーゴジ(s)、そして多くのピアニスト。なかでもビル・エヴァンス(p)からの影響は大きいよ。偉大なミュージシャンたちが楽器を通して成し遂げ、僕らに伝えてくれたことの半分、いや、ほんの僅かでも受け継ぐことができたら嬉しいね。そして、最終的に少しでも彼らに近づけることができたらと思っている。

—ジャズ以外の音楽も聴かれますか？

MI: ブラジル音楽、特にアントニオ・カルロス・ジョビンの大ファンだ。いつかブラジル人のシンガーと共演したいと思っている。ポルトガル語の響きがとても好きなんだ。他にはクラシック、レキエムなんかも聴くよ。

—ご自身のカルテット以外にはどんな活動をされていますか？

MI: ダニエーレ・スカンパピエコ(t)、リネー・ロジャース(b)、クラレンス・ベン

(ds)とのカルテット。ダニエーレも僕のキャリアを語る上では欠かせないうちのひとりなんだ。僕にとってはインスピレーションの泉のような存在で、彼と演奏するのはとても楽しいよ。

—今後の活動予定を教えてください。

MI: 僕のカルテットにファブリツィオを迎えて、継続的に活動できればと願っている。他にはルーカ・マンヌツァとのデュオなど、いくつかのプロジェクトが進んでいる。

—以前にどこかで、「音楽のことは全然わからないけれど、あなたの演奏に感動した」と言われるのは最高の称赞だ、と話されていたのがとても印象的でした。

MI: 人に感動を与えるのが僕らミュージシャンの仕事であり、少なくともそれができるといふ自信がある。とすると、ジャズや音楽に関心のある人からの僕らに対する褒め言葉は珍しいことではないだろう？ でも、まったく興味がないし、好きでもない人となるとそれはやない。つまり、彼らの評価というのはとても純粋で正直なものなんだ。だからこう言ってもらえた時、僕らの使命をまっとうしたことを意味するんだと思う。僕の演奏を聴いて、それをきっかけにジャズを好きになってくれたら、それは何よりの喜びで、真の感動を与えることができたということにはかならない。

## Ionata's Discography



『Lode 4 Joe』  
 Max Ionata  
 WIDE SOUND  
 WDS19

ジャズ、ジャイアンツ・ジョー・ベン・ターン(t)の音楽から、イオナタとピアニストのルーカ・マンヌツァがデュオで録音した、トリュニ・アルバム。ブルーノートなどに収録された数多くのジョーの名曲から、8曲を選び、そのどれもが原曲のセンスで新たな解釈を吹き込まれている。



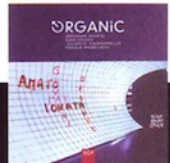
『Little Hand』  
 Max Ionata Quartet  
 About  
 ALB1017

2008年にリリースされた、イオナタのクワート・カルテット作品。語るに値するものは、(インスピレーション)でも共同演奏している、ルーカ・ニコラ・アンジェルツッチ(ds)の他、マルコ・ロッド(b)、ウェイン・ショーター(ta)のイェス・オア・ノーを含む4曲の収録している。



『ZAIRA』  
 Max Ionata/Claudio Filippini  
 WIDE SOUND  
 WD107

イオナタとピアニストのクラウディオ・フィリッピニとの音楽。2001年リリース作品。1曲でギター(ジャン・カルロ・アルファーニ)が入るほかには、クワート・カルテットでの演奏となっている。イオナタは好き嫌いながらも、全面で野太い咆哮を聴かせている。



『ORGANIC』  
 Amato/Ionata  
 Picanto Records  
 PIC014

ジョアキニ・アマト(t)とイオナタの音楽をフロントに録音。シリコリのハード・バップをプレイ、バックにはドラム(ニコラ・アンジェルツッチ)と、オルガン(ジュリアン・オリヴァー・マツタリエロ)のデュオ1アードの録音だが、聴かぬにも充分に盛り上げている。



『Tenor Legacy』  
 Scannapleco/Ionata  
 Picanto Records  
 PIC014

『ライヴ・ライヴ』でアマトリツィオ・ボッソ(t)とともにフロントを結ぶ。ダニエーレ・スカンパピエコ(t)と、イオナタの録音アルバム。ハード・バップを基調に、テナー・サクソフォーン・マツタリエロ)のデュオ1アードの録音だが、聴かぬにも充分に盛り上げている。